スケープゴートの子守歌

ふとん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スケープゴートの子守歌

【Ｎコード】
Ｎ８２６６Ｋ

【作者名】
ふとん

【あらすじ】
村で唯一の神父さまが亡くなった。
しかし後任の神父には秘密があって……。
はからずも秘密を知ってしまったメテリアは新しい神父に振り回される羽目になる。
「さぁ！　僕の胸に飛び込んでおいで！」
「十字架にでも抱きついてくださいませ、神父さま！」
ゴシック風ラブコメ。

邂逅

緑の葉が光彩を反射して、日だまりを造っていた。日だまりに踏み出すと、その場は暗く陰って煌めきがメテリアに移る。

彼女はふと瞳を細め、日だまりから抜け出た。

眼前に広がる林の向こうには、翳りを帯びた教会が見えた。彼女は教会へ続く小道を再び歩き出す。

普段は子供が遊んでいる林は死んだように静まりかえっている。

夏の陽光も冴え冴えと差し込んでいるようだった。人が歩くことによって自然とできた小道は乾いた埃を巻き上げた。

耳が痛い。

彼女は歩きながら目を伏せた。静寂は音という音を吸収し、頑強な壁で聴覚を遮っていた。自分の足音すら、聞こえない。

この辺境の村では、季節は夏と冬しかない。大半は冬で、夏はほんの数ヶ月に過ぎないが、この林は音に溢れているはずだった。夏は小鳥のさえずりや木々の葉音が、冬には積もった雪が小枝を軋ませる音が常に優しくあった。

靴が埃を舞い上げる。

いつも以上の人通りがあったのだ。

でこぼこにへこんだ道には深い轍が残っている。それは真っ直ぐ林と教会を繋ぐ。

昨日、教会の神父が死んだのだ。

各地に点在する教会には、最低一人の神父が常駐する。無論、寒村にも教会はあるので、中央部の教会から実習期間を終えた神父が派遣されてくるのだが、辺境に行きたがる神父は少ない。一度、寒村に派遣されると交替などはほとんど無く、出世の妨げになるのだ。必然的に、辺境へやって来るのは定年も間近の年老いた神父だった。

亡くなった神父も例外に漏れることなく、高齢だった。

メテリアは、本来なら昨日、彼に墓前に捧げるはずだった花束を

抱えて教会に向かっている。昨日は村人が多く、葬式に参列していたために行けなかったのだ。

今日も墓へ向かう人々が朝から出かけていくのを窓越しに見つけた。　結局、メテリアは墓前へ行くことを諦めて誰も居なくなった教会へと向かっている。

教会はどんよりと淀んで見えた。

神父が健在だった頃は、暗い林すらも光が差していたはずだが、居なくなった途端にその加護が消えてしまったようだった。

メテリアは教会の石段を登り、色褪せた扉の前で足を止めた。手に持った花束を見つめて、わずかに溜息をつく。

庭で咲いていたわずかな花をかき集めたが、華やかさとは無縁の花束だった。花屋へ行けば良いのだが、またあらぬ噂を立てられて家から出られなくなるのは苦痛だった。

花束の中にくすんだ赤紫を見つけて、彼女は苦笑する。メテリアの瞳も、紅蓮に近いクリムソンなのだ。髪は目立たないブラウンのくせに、瞳の色だけが突出していて不気味だった。一般に、こんな瞳を持つ者は居ない。

彼女は静かに扉を押した。

少し開いた隙間から、忍び込むように礼拝堂へ入る。礼拝堂には大きな天窓があり、天井から陽光が降り注ぐ。わずかな空気の流れを察して、小さな埃が光の中で舞い散る。

正面の十字架は、いつもよりも濃い闇に包まれて光の先には見えなかった。幾つか並べられた、古ぼけた長いすを両脇に、天窓の下まで進み出るが、メテリアは立ち止まった。

人の気配がするのだ。

十字架のおぼろげな輪郭しか見えない闇から、こちらに気がついたように靴音が響いた。

逃げた方が良いのか、メテリアは迷った。しかし、ウロウロと光の外へ後退している間に靴音の主は彼女が立っていた光の円の中に姿を現した。

背の高い男だった。表情を探して見上げると、そこには石膏で造られた彫像のような顔があった。女性的な優美さがある眉の下に鋭利な刃物のような双眸、彫りの深さを象徴する通った鼻筋、堅く引き結ばれているが薄紅の花弁の唇、いずれも名工が彫り上げた作品のようで黄金率によって配置されている。肩まで無造作に切られているのはプラチナブロンドで、陽光を反射して光彩を放っている。ただ、闇を集めて閉じこめたような漆黒の瞳が冷めた光を帯びて、女神のような印象を払拭していた。

こんな男が寂れた教会に何の用があるのだろう。視線を巡らせると彼は僧衣姿である。

新しい派遣神父だ。

メテリアは唐突に理解して、口を開きかけた神父より先に声を出した。

「初めまして。神父様。昨日、前任の神父様が亡くなられたと人伝に聞き及びましたので参りましたの。私、どうも人と接するのが苦手で墓前へは行けなかったのです。ですからこの教会の十字架の前にお花を差し上げようと思いましたの。我が家の庭で摘んだ花ですが、手向けていただけると光栄ですわ。では、私はこれで失礼いたします」

ほとんど一息に述べ上げると、メテリアは神父の返事を待たずに花束をその場に置いて全力疾走で教会を飛び出した。

再会

三日ぶりに外へ出ると、メテリアは路地裏を歩いていた。
昼間のうちにここを歩く者は一人もおらず、出会うのはせいぜい昼寝場所を目指す猫ばかりだ。表通りには幾つかの店が並んでいるが、必要最低限の生活用品や食料は一週間に一度、父親の使いが届けてくる。それ以外に何を買う必要もないので、昼間からメテリアは路地裏を歩いている。
今日は孤児院での下働きの日だった。必要最低限の生活用品は用意してもらえるが、生活費は自分で稼がなければならないのだ。
村営の孤児院は人手が足りないらしく、背に腹は変えられないとメテリアを雇い入れてくれた。肩書きだけは貴族でも、使用人など一人もいない生活を送ってきた彼女にとっては絶好の仕事先だった。前任の神父の口添えもあり、ようやく手に入れた仕事だが、当の神父が居なくなってしまった今、メテリアの扱いがどうなっているのかが気がかりだった。
「あら、混血児じゃない」
メテリアは足を止めて、路地の薄汚れた壁に視線を送った。
彼女と同じ年頃の少女たち三人が、メテリアを眺めて薄笑いを浮かべている。質素ではあるが小綺麗な服を着ているところを見ると、今日は学校があるらしい。だが、この時間は授業中のはずだ。
メテリアの疑問を察したのか、少女の一人が手のひらをヒラヒラと振った。
「いいわよね。アナタ、あんな退屈な授業に出なくて良いですもの」
学校をサボって路地裏に隠れているらしい。メテリアは内心呆れて足を進める。しかし、もう一人の少女に狭い道を遮られて再び立ち止まる。
「これから何処へお出かけ？　豚の血でも買いに行かれるのかしら」
冗談の中にも、ほんのわずかな怯えを見つけて、メテリアは冷め

た気分になった。
「吸血鬼の子供も大変よね。あたし達と同じもの食べても味を感じないんでしょ？」
もう一人の少女が、怯える仕草でメテリアを見遣る。
吸血鬼は、人間に淘汰された自然の中でも身近な脅威である。
彼等の主食は生き血であり、人の血が好物だ。厄介なことに彼等は尋常ならざる力を持ち、自然を操る能力を備えている怪物である。そして時に、戯れにか彼等にとって餌であるはずの人間と交わり子を成すことがあるのだ。
出生率の低いその子供は、混血児、ダンピールと呼ばれている。
「急ぎますので、通していただけませんか」
「アナタにお願いされるなんて、あたしも偉くなったものね」
道を塞いでいる少女が戯けて笑う。
「アナタ、まだ解らないのね」
壁際からダンピールと呼びかけてきた少女が可愛らしい顔に妖婦のような笑みを浮かべる。
「アナタはこの村には要らないのよ。あたし達は早く出て行ってほしいの。アナタにできることはそれだけよ」
少女はふっと息を吐き出し、唇を歪める。
「アナタがいつか吸血鬼になったら、あたし達の身が危ないでしょ？」
嬌声が路地裏に響いた。
メテリアは溜息を漏らす。
混血児は確かに二分される性格を持っているが、たとえ、吸血鬼になったとしても、この少女達を襲うことは無いだろう。
吸血された人間は、グールという吸血鬼になる。グールは血への渇望が激しく、生前の記憶もない動く死人だが、混血児の吸血鬼化は記憶を保ったままの嗜好的な変化なのだ。
「本当に急いでいるんです。通していただけませんか」
メテリアは瞳を細めた。この娘達にかまうのは時間の無駄だ。

「あ、アナタ、話聞いてたの？　アナタに居場所はないの！　通りたかったら表通りを通ったら？」
クリムソンの瞳に、吸血鬼が持つという赤い目を重ねたのだろうか。一人の少女に僅かな恐怖が落ちた。
吸血鬼が主に活動するのは、大都市が主で、こんな辺境の村にやって来ることはない。村人の大半は、本物の吸血鬼を見たことがないのだ。そこへ、模倣的な吸血鬼である混血児が入ってくることになれば、反応は様々だ。
訳も無く怯える者。排除しようとする者。
少女達は後者らしい。恐らく、親から延々と聞かされた恐怖を受け継いで、恐怖の根幹を追い出す英雄気分なのだ。
「急いでいますので、通していただけませんか」
「だから、アナタのお願いなんて聞く気はないのよ！」
メテリアの父は、この村も含む周辺一帯の領主だ。それを笠に着るつもりはないが、追い出されて困るのは少女達である。
馬鹿馬鹿しい。
メテリアはクリムソン色の目を吊り上げた。
「私は、お願いしているのではありませんよ」
少女達が息を呑むのが解った。
「お、脅したって無駄よ！　パパに言いつけてやるから！」
話の通じない相手と対話するつもりはない。
「もう一度申し上げましょう」
メテリアは極めてゆっくりと、叩きつけるように少女達を見遣る。
「急いでおりますので、通していただけませんか」
少女達は即座に身を翻した。口々に罵られてはいたが、彼女は無事裏路地を抜けた。

薄暗い路地を抜けると、草原がある。その壊れかけの柵の向こう

はなだらかな丘陵地帯で、墓地があった。整然と立ち並ぶ墓石のその向こうに孤児院はある。
メテリアは、舗装されていない小道を歩きながら路地からは見えなかった空を見上げた。
雲一つない空だ。青々とした蒼空を眺めて、彼女は溜息をつく。
先ほどの路地でのやりとりは日常茶飯事だ。辛くないといえば、嘘になる。だが、本当に怖いのは意味のないいじめではない。
もし、吸血鬼の犠牲者が一人でも出ることになれば、まず疑いをかけられるのはメテリアだ。集団ヒステリーに陥った村人達はろくに調べもせずに彼女を殺すだろう。いつかくるその時のために、メテリアはひっそりと暮らさなければならなかった。
「あーっ！　メテリア姉ちゃんだぁっ！」
唐突に呼びかけられて、メテリアは周囲を見回した。
いつのまにか墓地の真ん中を歩いていたらしい。青々と茂った草むらに墓石が続いている。その周りを、広場のように遊んでいる子供達がいた。
「今日和。今日はいい天気ね」
薄汚れた衣服を着せられている子供達はメテリアを見つけて次々に駆け寄ってくる。
「姉ちゃん、今日の昼飯はぁ？」
「ねぇ、あたしの人形しらない？」
「早く遊ぼうぜ、姉ちゃん」
「この前の本の続き読んでよ」
「今日、お客さんが来てるよ」
ふと、異変を聞きつけて、一人の少年にメテリアは視線をやった。
「お客様？」
少年は大きく頷く。
「そうだよ。今、院長先生と話してる」
孤児院に客とは珍しい。だが、下働きのメテリアには関わりのないことだろう。

彼女は子供達に手を引かれて、墓地の丘を下った。
村の隣りにある山から雪解けの水を運ぶ小さな川の畔に孤児院はある。村の教会とよく似た造りで、四階建ての古い屋敷だ。
あちこち雨漏りしているが、修繕費がまかなえないほどの資金しかないため、メテリアの給金もしばしば滞る。
正面には観音開きの重厚な扉がついており、そこから入ると小さな礼拝堂がある。そこから裏手に回ると物置小屋があり、その向こうに小さなドアがついている。そこが孤児院の入り口だった。
メテリアは子供達と別れ、入ってすぐ右にある台所へ向かう。
この孤児院で働いているのは、メテリアを含めて二人。その内の一人は、村の老婆で、腰が痛くなるとしばしば動けなくなった。そのため、メテリアが一人で仕事をこなすことが多くなりつつあった。
「メテリアさん」
台所の入り口から呼ばれて、振り返ると院長がにこやかに手招きをしている。メテリアはこの中年の尼僧が笑った顔など今まで見たことがなかった。常に不安そうで世の中全ての不幸を背負うように眉根を寄せているのだ。
不気味に思いつつ、返事をすると院長はにこやかに続けた。
「喜んでね。これから新しくここを手伝って下さる方がいらっしゃったのよ」
いつも、働き手が増えると余分に給金を支払わなければならないとメソメソ泣いているというのに、どういう風の吹き回しだろうか。とりあえず、生返事を返しておくことにした。
「はぁ。それは良かったですね」
「今、いらっしゃっているからアナタもご挨拶してきてちょうだい」
メテリアは素早く目端を利かせて食器棚のカップを数えた。数が減っていない。そのくせ、一番高い茶葉の缶が消えている。
（……ということは、カップは院長先生のお気に入りを出したのね）
院長は村から支給される孤児院の維持費から少しずつくすねて裏金を作っている。その金で、孤児院での一ヶ月分の食費が飛ぶよう

なティーセットを買ったのだ。いつもは自室に隠し持っているが、今日は相当特別な客だったらしい。
「さ、早く行ってきて」
いつになく朗らかにメテリアを台所から追い出すと、院長は鼻歌交じりに自室へ戻っていった。
これから昼食を作らなければ、時間に間に合わない。そうなれば腹を空かせた子供が暴れ出す。だが、院長の言いつけを守らなければ即解雇だ。
メテリアは仕方なく、客間へ向かった。
正面から入ってすぐの階段を上り、二階の廊下をしばらく歩くと小綺麗なドアがある。普段は子供達の立ち入りが禁止されている客間なのだ。
ドア前に立って、ノックする。しかし返事はない。
無礼を承知で開くと、サイドテーブルに空のカップが置きっ放しになっているだけでソファには誰も座っていなかった。
帰ったのだろうか。
だとすれば好都合だ。メテリアはさっさと部屋を後にして、二階を去ってしまおうと階段を下り始める。
そこへ、階段の横を長身の男が横切った。
段へ踏み出した足を、メテリアは思わず引っ込める。
新しく派遣されてきた、彫像の神父だ。優雅に歩を進める姿はさながらお伽話の妖精のようだった。
何故、あの神父がいるのだ。
メテリアは冷や汗もそこそこに静かに後退した。顔を合わせていきなり逃げるという暴挙をしてしまったのだ。自然と足も後ずさる。
だが、あの場合はああするしかなかったのだ。暗闇でメテリアの瞳を見れば、少なからず赤く見えてしまう。神父は吸血鬼を狩ることを生業としているハンターとは違い、吸血鬼を本気で憎んでいる節がある。吸血鬼と判断できる要素のある者を徹底的に迫害する者もいるのだ。そのために、中央からやってきた世間知らずの神父の

お陰で吸血鬼に分化もしていないダンピールが幾人も殺されている。
逃げるべきか、堂々と横を通り過ぎるべきか。
メテリアは即決した。
階段に足を踏み出し、下り始める。
神父が気がつかなければそれで良い。早足にならないように、靴音も小さくなりすぎない程度に立てた。
階段を下りきると、神父が向かった反対方向の台所へ向かう。
背を向けていると後ろから肩を叩かれるのではないかと怯えるが、それは極力考えないよう努めた。
あと数歩。手を伸ばせば、台所のドアの取っ手を掴むことができる。
「おや」
背中を一筋の汗が通り抜けた。
取っ手を掴みかけた手が何者かの長く細い指に絡め取られる。
「また会いましたね」
鳥肌が立つほど甘く透る声が耳元で囁かれる。
メテリアは奇しくも台所の手前で立ち往生する羽目になってしまった。自分の不運を呪いつつ、彼女は絡められた手を払ってドアを背に振り返る。
「お久しぶりですわ。神父様」
息すらも届くほどの距離でこちらを眺めているのは、案の定、先日の彫像神父だった。
昼間であるにもかかわらず、冴えた夜の空気を纏った神父は窓から差し込む僅かな陽光に肩までのプラチナブロンドの髪を煌めかせている。こんな状況で無ければ見惚れてしまっていただろうが、顔の全筋肉を総動員してメテリアは笑みを作る。
「先日は申し訳ありませんでした」
メテリアに覆い被さるような姿勢のまま、神父はにっこりと微笑んだ。笑えば、闇を彷彿とさせる漆黒の眼光が和らいだように思えた。

「突然、逃げられてしまって驚きましたよ」
メテリアは若干顔を引きつらせたが、何とか表情を保つ。
「神父様、今日は何のご用でこちらに？」
「お聞きになっていませんか？」
神父はメテリアの目に語りかけるように口を開く。
「こちらのお手伝いをすることになったのです。身寄りのない憐れな子等のお世話をさせて頂くのも、神職に努める私の役目と思いましたので」
内容は敬虔だが、甘く囁きかける口調は、およそ神に仕える身とは思えない。
近づいてくる神父の目からメテリアは自分の視線を逸らした。
「そうでしたの。ご立派なお心構えですわ」
神父はじっとメテリアを見つめて、やがて体を離した。
「……君が、ダンピールと噂されている娘さんか」
メテリアがむっとして見遣ると、神父は横柄ともいえる態度で冷めた双眸をこちらに向けている。親切丁寧な姿勢は無く、腕を組んで漆黒の眼を細めた。
応えず睨み返すと、神父は息をついた。
「あまり馬鹿にしないでくれよ。君がダンピールじゃないことぐらい判る」
意外な言葉を聞いて、メテリアは思わず眼を丸くした。
「第一、この村に君のダンピール登録はない。だとすれば…」
「……クオーター」
メテリアは眼を逸らして応える。
「人の父と混血児の母との間に生まれたの。だから血の乾きも、能力も何もないんです」
だが、父親の一族はメテリアを嫌い、領地の辺境であるこの村に追い出したのだ。
「なるほどね。じゃぁ、逃げる必要はないじゃないか」
「それは、アナタが神父だからです」

神父は苦笑した。教会の中では吸血鬼撲滅運動が激しいことを知っているらしかった。
「神父じゃなかったら逃げなかった、と？」
彼であれば、どんな格好であろうと逃げていただろう。
メテリアが顔をしかめると、神父は面白がるように口の端を上げる。
「まぁ、とりあえず話ができて嬉しいよ。ミス・メテリア」
「……私の名前……」
驚くメテリアをよそに、神父は先ほどとは正反対の神父らしい笑みをその端麗な容貌に浮かべた。
「新しく、クレメント村に派遣されて参りました。リューク・ゼプツェン神父です。以後よろしくお願いします」
その微笑みは、この上もなく詐欺師の笑み近いとメテリアは感じた。

非日常

その神父は言った。
世の中に生まれてきてはならないものがある、と。
だが、それはお前ではない。お前は神に祝福され、両親に愛されて生まれてきた子供なのだ、と。
（……でしたら神父様、どうか今のこの状況を打開する策をお授け下さい）
メテリアは子供が一人入れるような鍋に一杯作ったシチューをお玉杓子でかき混ぜながら、心持ち天を仰いだ。
昼時である。メテリアは一人、孤児院全員の食事を作っていた。
「ミス・メテリア」
否、メテリア一人ではない。彼女は耳元に上質な砂糖菓子のように甘い声を囁かれてうんざりと顔をしかめた
「何でしょうか。神父様」
メテリアが振り返ると、プラチナブロンドの神父は口の端を上げた。その容貌は驚くほど端正で、闇を集めた漆黒の瞳と相まって冴えた女神をも思わせる。
一週間前から、この美しい神父は孤児院の手伝いにやって来ていた。午前の礼拝を終えてから、昼時の戦場のような孤児院を手伝いに来る。その後はまた午後の礼拝で、それが終わるとまた孤児院に来た。この神父が村にやって来てから二週間弱だが、彼の評判は高く、村人達は全幅の信頼を置き始めているようだった。その証拠に、「あまり馴れ馴れしくなさらないで下さい。そのお陰で私はまたありもしない罪状を増やされました」
メテリアに絡んでくる少女達が、メテリアが神父をたぶらかそうとしているだの、神父はその程度の誘惑には負けないだの、神父はこう言った、神父はああ言ったと近頃うるさいのだ。
（どいつもコイツも神父、神父……）

今日は腰を痛めて手伝いに来ていない老婆さえも口を開けば、神父様はまだかね、とメテリアに尋ねてくる。
催眠術でもかけようかというほどの神父人気である。
「ミス・メテリアの反応は面白いから」
渦中の神父はメテリアの警告に近い忠告を無視して、彼女の肩に長い指を滑らせる。メテリアは背中に鳥肌が立つのを感じて肩を竦めた。それを面白がるように、神父は長身を折り曲げて彼女を覗き込む。
「こういうことをして倒れなかった人間は初めてでね」
メテリアの首筋に花弁を散らすような吐息がかかった。花の濃密な甘い香りが鼻孔をくすぐる。それが神父の唇から漏れるのだと判るとますます鳥肌が立ったので、メテリアは神父を無視してシチューをかき混ぜる作業に戻った。
「神父様は食器を運んで下さい。食卓にテーブルクロスを敷くのを忘れずに」
メテリアが丁寧な口調で心のこもらない言葉を投げると、
「そういえば、君は髪を結い上げないのかな。もう良い年齢だろう」
神父は彼女が日頃気にしていることを無神経に言ってのけてくれる。十五になれば皆髪を結い上げるのが習慣だ。だが、メテリアには結い上げてくれるような女性は居ない上、自身も髪を結うには不器用過ぎた。わずかな意地でお下げにしているが紐を解けばスルスルと滑る髪はウェーブすらも描かず、すぐさま真っ直ぐになってしまう。髪を切ることも考えたが、それは父に止められているために今や腰まで届こうかという長さだ。メテリアにとって、瞳の色の次に気に入らないウィークポイントだった。
「早く作業に移ってください」
メテリアは神父の言葉には応えず、お玉杓子でシチューを一すくいして小皿に垂らした。今日のシチューは珍しく手に入った香辛料といつもの芋と豆を煮込んでいる。小皿に取り分けたシチューを舐めると、香辛料がわずかに舌を刺激した。ミルクで味を調えれば良

いだろう。
　メテリアが顔を上げかけると、後ろ首に柔らかな感触を覚えて思わず動きを止めた。
　微かな花の香りが、さらりと垂れかかる銀糸に混ざって流れる。生暖かい、自分の体温ではない他人の温もりがうなじを通じて伝わる。
　横目で辛うじて捉えたのは、見慣れたプラチナブロンドだった。
「何をしてるんです！」
　メテリアは奪われかけた感覚を自分に取り戻して自分の首筋を守るように撫でた。まだ温もりが残っており、若干湿っている。こともあろうか、神父が彼女のうなじに唇を押しつけてきたのだ。
「食べたら美味しいのかと思って」
　神父は自分の唇をなぞって、行動とは裏腹に真面目な顔で眼を細める。メテリアが息を詰まらせていると、
「何が美味しいの？」
　一人の少年が台所を覗いて、こちらを眺めていた。メテリアは顔を引きつらせたが、神父はさも何事もなかったように、にこやかに応える。
「今日のシチューの味見だよ」
「今日はシチューなんだ？　やった！」
　少年は小躍りして台所から去っていってしまう。メテリアは何とか理由をつけて留まらせたかったのだが、結局、咄嗟に理由を思いつけずに上げかけた手を空しく下げた。
「さ、ミス・メテリア。続けましょうか」
　今度は皮肉な笑みを浮かべながら、神父はメテリアの腰に手を回す。
「やめて下さい！」
　メテリアは乱暴にお玉杓子を神父に押しつけ、神父の手からすり抜けるとテーブルクロスを探して壁際の棚へと向かう。
　何を考えているのか、今評判の神父はことあるごとにメテリアに

張り付いてくるのだ。孤児院、帰り道問わず、自分の時間が許す限り、メテリアと共に行動してくる。全て彼の都合なので、メテリアの都合はお構いなしだ。メテリアは身の毛もよだつような神父のスキンシップにいい加減、堪忍袋の緒も切れそうなのだが、村人達の反応を見てしまうと、自分一人だけが神父を悪し様に扱うことはためらわれた。そんな事情も呑み込んでか、神父の行動は日に日にセクハラの色を強めていく。

「……何であんな場所に……」

棚の上にテーブルクロスがある。普段であれこんな高い場所に置くことはないのだが、昨日片づけていた神父が置いたのだろう。

メテリアは神父への反感をまた一つ増やして椅子を足場に棚に手を伸ばす。

しかし、その後ろから、ひょいと手が伸びてきてテーブルクロスを取ってしまう。メテリアが振り返ると神父がテーブルクロスを片手に微笑んだ。そのまま、神父は当然のようにメテリアの腰を抱えて椅子から彼女を降ろす。

「細いね。ちゃんと食べてる？」

「神父様……」

メテリアはこめかみを人差し指で押さえつけた。

「何ですか？　ミス・メテリア」

銅像も溶かすような笑みを浮かべる神父をメテリアは睨みつける。

「セクハラで訴えますよ」

「誰も見てないのに？」

どんな犯罪であろうと、立証できなければ罪は無いも同然だ。

（神父様、天国から見ておられるのでしたら、どうかこの神父の居ない生活をお与え下さい）

最近のメテリアの切実な願いだった。

秘密

老年の神父はクオーターであるメテリアを他の子供と同じように扱った理解ある人だった。村の子供にいじめられれば、慰め、諭してくれた。

彼等は怖いのだ、と。

自分と異なる存在が、怖いのだ。

異なるものを恐れるのは、誰しも持つ防衛本能だ。それを理解し、受け入れることができれば、それは知識となる。

生まれてきてはならないものは、確かにある。だが、それはお前ではないのだ、と。

※

メテリアは裏路地を歩きながら、ぼんやりと遠くに見える空を眺める。

真昼の空は雲を浮かべて、ゆっくりと時を刻んでいる。

今は昼寝の時間で、普段であればのんびりと休憩ができる時間なのだが、今日に限って院長に用事を頼まれてしまった。

腰を痛めて今日も休んでいる老婆の様子を見てこいというのだ。そんなことをわざわざ頼まれることなど一切無いのだが、今日は午後からお客が来るようだった。街から金を持て余した資産家が、憐れな孤児院を視察にやって来るのだ。それは不定期で、いつやって来るか判らない。名目上は、院長が一人で孤児院を切り盛りしていることになっているので、メテリアが居ては援助金交渉の邪魔にな

るのだ。
老婆の家に尋ねてみたが、いつも変わらず彼女は椅子に座って編み物をしていた。編み上がったらこのマフラーはあげるよ、などと言っていたが、明日になれば忘れているだろう。その老婆に今度は教会に行って聖書を借りてこいと頼まれた。
教会には、あの神父がいる。
午後の礼拝時間には教会へ帰っているはずだ。
それを承知で老婆はメテリアに聖書を借りてこいというのだ。ここで、嫌な顔をすれば孤児院から追い出されるのだろうか、と危険な思想が脳裏をよぎってメテリアは教会に向かっている。
路地裏を抜け、家が少なくなるとその向こうに舗装もない小道が林に続く。
林は昼間でも薄暗く、得体のしれない鳥の鳴き声が響いた。前の神父が居た頃は、こんな心細くなるような雰囲気はなかった。
メテリアは思わず林を見回し、眉根をひそめる。
昼間だというのに空気が冴えている。まるでこの場だけ夜が降ってきているようだ。
彼女は小道をかけだした。湿り気を帯びた道は靴に絡んで、冷えた空気は頬を打つ。
教会が見えてくる頃には、メテリアの手足を冷え切ってその割に体の奥だけは息苦しいほど火照っていた。彼女は少しでも上がりきった息を整えようと、教会の裏手に入った。
ここだけは、林に遮られずに日が当たるので、小さな野原ができていた。踏みだそうとして、顔を上げると野原に人影を見つけて、メテリアは教会の壁の陰に隠れる。
礼拝時間のはずだが、神父が野原でたたずんでいるのだ。
メテリアが覗いていることも気づかないらしく、彼は夏に咲き誇る花々を摘み取っていた。両手に余るほど摘み取ると、そっと口づける。その奇怪な行動は質を伴った。
口づけられた花々が、途端に枯れ始めたのだ。

茶色く濁り、ついには花弁を散らして枯れ草となってしまう。神父の白い指の間から滑り落ちると、跡形もなく、土へと還る。
メテリアは教会の壁に張り付いたまま、壁を背にして俯いた。
花は生気を吸い取られている。
神父の吐息から漏れた花の濃密な香りが思い出されて、メテリアは口を押さえた。
押さえた手が震えて、少しでも気を抜けば倒れ込むか叫び出しそうだ。
あの神父は、
「ミス・メテリア……」
密のように甘い声。
顔を上げると、教会にかかるレリーフの天使のような神父が無表情に立っている。メテリアは駆けだした。
だが、何処へ逃げれば良いのかも判らず、気がつけば、教会の中へ駆け込んでいた。薄暗さの中に埋もれた十字架を見つけて駆け寄ると、振り返る。
神父が天窓を挟んで、メテリアを静かに見つめている。彼は歩き出すと、躊躇もせず天窓の下の陽光をくぐってメテリアの前に立つ。
メテリアは声も出せないまま、十字架の側に置かれた聖水の入った小瓶を手に取る。そして神父に向かって間髪入れずに聖水をぶちまけた。
聖水を頭から浴びた神父はしばらく眼を伏せていたが、やがて濡れた前髪を掻き上げ、メテリアを覆うように見下ろした。
「気は済んだかな」
「っ！」
メテリアは息を詰まらせ、眉根を寄せる。
「吸血鬼なのに……聖水が効かない……！」
引きつった声を上げると、神父は漆黒の眼を細めて唇の端を上げた。
「頭の良い女性は、嫌いじゃないよ」

神父はメテリアの頬に触れる。その手は氷のように冷たい。
「よく判ったね……」
メテリアは後退るが、十字架の台に邪魔されて結局その場に釘付けにされる。神父の白い指は彼女の頬から細い首筋に這った。
吸血鬼は、何も人の血液だけを食料としているわけではない。
彼等は、その気になれば大気からも生気を吸い取ることができる。生気さえ吸い取ることができれば人を殺す必要もないのだが、厄介なことに吸血鬼の好物が人の血なのだ。
「聖水が効かないなんて……」
聖水は、吸血鬼を払うために不可欠なもののはずだった。しかしこの神父は頭から被ろうと平然としている。
メテリアは息を呑んだ。
神父は、吸血鬼にとって天敵であるはずの陽光も効いていない。彼は、日溜まりの中で食事をしていたのだ。
「……貴方は……」
神父はメテリアの顎を捉えて、彼女の怯えた視線を正面から見据えた。
「君を食べたら、美味しいのかな?」
昼時に真剣な表情で神父が見つめてきた理由が、メテリアの中で符合する。
声を無くしたメテリアはぐいと顎を引かれる。
神父の吐息が首筋に淡くかかり、彼女は鳥肌を覚えた。
総毛立つ首筋に、柔らかな感触が噛み付いてくる。
薄皮を通して焼け付くような体温を感じて、メテリアは眼をきつく閉じた。火をつけられた肌に烙印を押す牙の先が触れる。
「……あれ?」
ほんの寸前である。神父が素っ頓狂な声を上げたかと思うと、首筋から熱が引いた。
眼をあけると、神父が複雑な表情でメテリアを見つめている。
怪訝にメテリアが眉をしかめると、神父も同じように眉根を寄せ

た。
「……君、もしかして処女？」
メテリアの顔に火がついた。
大声よりも、彼女の手が早い。
うなりを上げて神父の呆けた横面を捉えると、細い手は小気味よい速度で振り抜かれる。
甲高い破裂音が教会に響いた。
「この、変態吸血鬼！」
「……元気だねぇ」
神父は柳眉をわずかにしかめて赤く腫れてきた頬を体温の低い手で冷やすようにさする。
「でも、結婚してなくても恋人の一人や二人いるかと思ってたよ。それを抜きにしてもまさか処…」
「その口、二度と開かなくしてあげるわ！」
メテリアは顔を真っ赤に染めたまま、先程とは反対側をはたき落とそうと再び手を上げる。
「待った」
神父はメテリアの手を反射的に捉える。
「うん。俺が悪かった。でもね、ちょっと話を…」
今度はまだ自由の利く手を上げたが、結局神父に掴み取られてメテリアは両手を広げる形となってしまった。
「……話を聞いてくれないかな」
呆れ調子の神父に視線を合わされて、メテリアは彼を睨みつける。
「……話を聞く体勢じゃないでしょう」
「もう暴力は振るわないと言ってくれるなら放すよ」
「保証はできないわ」
「じゃぁ、駄目だ」
あっさりと拒否されて、メテリアは顔をしかめて視線を逸らす。
このままでは、
「暴れるなら、食べてしまった方が早いしね」

メテリアは血の気が引いていくのを感じた。
吸血鬼に血を吸われ尽くせば、メテリアは生きた屍となってこの神父が死ぬまで付き従う羽目になってしまう。
蒼白になったメテリアを、神父は最後通告のように覗き込んでくる。
「どうする？」
最善の選択肢は一つしかなかった。
「……わかったわ。アンタに従うわよ」
メテリアが不機嫌に言い放つと、神父は大きく息を吐いて彼女の腕を放した。
「ああ、助かったぁ……」
それはメテリアの台詞だ。訝るメテリアを尻目に神父は濡れた髪を掻き上げた。
「ありがとう。あのまま君を食べてしまっていたら俺が殺されるところだった」
メテリアが神父に殺されるところだったのだ。
「……何で、私がアンタに礼を言われなくちゃならないのよ」
「規則でね。百歳以下の吸血鬼はお嫁さん貰っちゃ駄目なんだ」
嫁。
誰が、誰の嫁だ。
「……どういうことか、詳しく説明してもらえない？」
「俺たちに血を吸われた人間が下僕になるのは知っているね？」
神父は一番近い椅子にもたれかかった。そのまま長い足を組む。
「それは俺たちの仲間になるんじゃなくて、ただの生きる屍であって、違う存在なんだ。じゃぁ、俺たちがどうやって仲間を増やしていると思う？」
血を吸われた人が吸血鬼の下僕になるのは常識だ。しかし、彼等がどうやって繁殖しているのかは問われたことがない。
メテリアが答えに窮すると、神父は肩を竦めた。
「簡単だよ。人間を仲間に迎えるんだ。自分の伴侶として、自分の

子供として」
「でも、それじゃぁ新しく仲間になっても、迎えた吸血鬼の下僕じゃない」
「人間でも、結婚するまでは貞操を守る習慣があるだろ？　それと同じだよ。処女や童貞は、人間の血を抜いてから俺たちの血を与えると俺たちの仲間になるんだ」
彼等は、人間を人外に変える力を持っている。
メテリアは急に肌寒さを感じて、神父から眼を放した。
「……血を抜き取られたままだったら？」
「当然、死ぬ」
神父にとっては当たり前のこと。だが、メテリアは吐き気を感じて彼を睨んだ。
「やっぱり最低ね！　人を、何だと思っているの！」
人の言葉を話していても、彼はやはり、人の敵である吸血鬼なのだ。
「どう思われようと、これが俺の日常だから」
メテリアの罵声を神父は受け流すように手を振った。
「君は、豚や牛を食べるだろう？　俺たちにとって、人間は彼等と同じ存在なんだ。病気になられれば俺たちが困るし、数が激減してもらっても困る。君たちを無闇に襲って食べてしまっては、最後に困るのは俺たちだ。自分達の仲間を食べるということは、人間が人間を食べる行為だろう？　人間社会では、そういう習慣がある地域もあるらしいけど、衛生上からも倫理的に見ても良い習慣じゃないからね」
酷い理屈だ。だが、メテリアは冴えてきた脳裏を巡らせる。
彼等は豚や牛と同等である人間と一緒に暮らしている。それは、人が豚や牛と一緒に暮らすことと似ている。だが、彼等は人間を自らの仲間に加えるという。
「おかしいわ。その理屈」
メテリアは眼前に神父を捉えた。

「私達は、豚や牛と家族のように暮らすことができるわ。でも本当の家族にはなれない。彼等は私達の家畜として、食料として暮らしているから。アンタ達が人を家畜と呼ぶなら、何故アンタ達はその家畜を本当の家族に迎えることができるの？」
神父は少し目を見開いた。長い睫毛の下から漆黒の瞳が覗いてメテリアを映す。
「面白いね。君は」
そう言って少し笑うと、神父は今まで見せたことのないような柔らかな笑みを美貌に浮かべた。
「……質問の答えは？」
胡散臭さを感じてメテリアは口を歪める。神父は椅子の背もたれに背中を預けて大きく伸びをする。
「そういう難しいこと、よく思いつくよ。論議は別の人としてくれない？　それよりさ……」
彼は再びメテリアを見遣って、にっこりと笑む。その笑みにメテリアは只ならぬ作為を感じて身を引く。
「君は食べないから、その代わりお願い聞いてくれないかな」
あくまでも甘い声は拒絶を許さない、ただの強迫だった。

事件

習慣というものは恐ろしいものだ。
三日以上続ければ人は慣れていく動物だったことをメテリアは実感していた。
屋根裏部屋と言っても過言ではないこの部屋は殺風景だ。
小綺麗ではあるが古びたベッドが一つ、座れば軋む椅子が一つ、そして脚を補強されて使われているテーブルが一つ。壁には本棚があるものの、そこには貸し出し専用の聖書が二十冊ほど置かれているだけで、天井まである棚はほとんど埃を被っている。
「朝よ」
メテリアはベッドの掛け布団の端を掴んだ。そして勢いよく剥ぎ取る。
こうしてようやく顔を現すのは、目の覚めるような麗人である。目を閉じた姿も麗しいことこの上ない。見目も麗しい男の第一声は、
「……もう少し寝かせてくれ……」
この甘い声で囁かれれば、誰もが永遠に寝かせてやろうと血迷うのだろう。だが、メテリアは眉を引くつかせた。
「なに子供みたいなこと言ってるのよ！　起きなさい！」
男の耳元に突き刺すような罵声を浴びせて、メテリアは彼のシャツの裾を掴んだ。
「せっかく作った朝食が覚めるわ！　お・き・な・さ・い・よ！」
掴んだシャツをさらに揺すっていると、男はやっと薄目を開ける。
「……あ、ミス・メテリア……」
ぼんやりと長く白い指を自分のシャツを握るメテリアの手に絡めたかと思うと、男は力尽きたように突然項垂れた。
「……僕はもう駄目だ……」
「とか何とか言って、寝惚けないでよ！」
メテリアの声が朝の林に吸い込まれた。

こうして一階の食卓に降りてくるのは、寝惚け眼の男ではなく僧衣姿の神父だ。
「おはよう。ミス・メテリア」
若干眠たげではあるが、しっかりと漆黒の双眸でメテリアを捉える。
「おはようございます。神父様」
テーブルに皿を並べて、メテリアは最後にパンのカゴを置いて、腰に手を当てた。
「今日は野菜スープにスクランブルエッグ、サラダ、パン、コーヒーです」
「ありがとうございます」
世にも珍しいほど麗色を備えた神父は素直に食卓について祈りの言葉を呟いて、パンを手に取った。
メテリアが早々に踵を返すと、
「まぁまぁ。ご一緒にコーヒーでもいかがですか」
結局引き留められて、彼女は神父の向かいに座る。
「……吸血鬼も、普通の食事を摂るのね」
メテリアは自分のカップにポットからコーヒーを注いでテーブルに置く。コーヒーからは緩やかに湯気が上った。
「まぁ、大半の方々は霞を食べて生きてるんだけどね。俺は特別」
神父は優雅な手つきでパンをちぎって、紅唇と呼んでも良い形の整った口へと放り込む。
メテリアが神父の食事の世話をするようになって、五日目を迎えようとしていた。
彼が吸血鬼であるという事実を知ってしまったメテリアに、神父は妙な、彼にとっては切実だった交換条件を出してきたのだ。

メテリアを殺さない代わりに、彼女が神父の食事の世話をすること。　早朝から起き出して教会へ行き、朝食を作って神父を起こす。昼食は孤児院で食べさせて、再び夕食を作りに教会へ向かう。
第一日目からうんざりとしていたメテリアだったが、習慣の成せる技なのか、この生活が日常となりつつあった。
「どうでもいいけど、どうして今まで食事を作ってなかったの？」
驚くべきことに、神父がこの教会に派遣されてきてから二週間弱もの間、彼は花の生気だけで生きていたのだという。
「夏の間は良いけど、冬になったらどうするつもりだったわけ？草なんて生えないわよ」
冬は一面銀世界だ。目に見える動植物はない。
「教会に礼拝にやって来るお客さんの生気を掠めとる」
神父はナイフでスクランブルエッグを切り分ける。
「吸血鬼って、案外せこいことやってるのね」
メテリアの言葉に、神父はフォークを取り落としそうになった。
「血が欲しいって言って、分けてくれると思う？」
「思わない」
吸血鬼は人類の敵だ。というのが世間様の意見だ。こんなご時世にわざわざ吸血鬼を生かすために献血してくれるようなバカはいないだろう。
「……私が食事を作りにこなかったら、アンタは血を奪いに行ったの？」
「さぁ？　誰しも飢餓状態に陥ったら何をするか解らないから、行ったかもしれないな」
サラダの野菜がフォークを刺されてパキリと音を鳴らした。
「でも、今はミス・メテリアが来てくれているし、大丈夫。行かないよ」
フォークで突き刺した夏茄子を神父はかじる。唇の奥に長い牙を見つけて、その不似合いさ加減にメテリアは苦笑した。吸血鬼が夏茄子をかじる姿など、そうそう見られるものではない。

「だとしたら、ミス・メテリアは村の大恩人になるね。もっと胸を張ってごらん」
大きなことを言ってくれる。
「吸血鬼に脅されて食事作るのが人助け？　誰にだってできるわ」
そんなことで威張れるなら、メテリアを緩やかに排除していこうとする村人と、あの村の少女達同じだ。
「どんなことでも、英雄を気取ってみて良いんだよ。大したことをして無くったって、勇者になれることだってある。それに、君は大したものだよ。俺を目の前にして、平然としていられるんだから」
容姿自慢か。
「おあいにく様。その程度の美形は見慣れてるわ」
幾ら領主の娘だと言っても、吸血鬼のクオーターという娘に付き従おうとする者はいない。ただ一人、一週間に一度やって来る父の使いだけが飽きもせず、辞めもせずに生活用品を届けてくれている。彼がまだ少年だった頃からほとんど会話をすることもない付き合いだが、彼は眼前の神父に負けず劣らない美貌の持ち主だ。
「何だ、やっぱり恋人がいるんじゃないか」
「違うわ。父の使いの人よ」
たったそれだけの交流しか、孤児院に勤めるまでは許されてはいなかったのだ。好意を抱く前に、自分の出生について覚えた。
「怖い者知らずの人。クオーターの娘にわざわざ物資を届けてやろうって言う人よ」
「なら、君も怖い者知らずだな」
神父は静かに野菜スープをすする。
「吸血鬼と一緒にこの食卓へつける肝の太さには感服するよ」
むっとしてメテリアが口を開きかけると、突然ドアが叩かれた。この母屋は礼拝堂とつながっていて、ちょうど打ち鳴らされたのは礼拝堂側のドアだった。
「神父様、神父様！」
切羽詰まった女の声。

その声に聞き覚えを感じて、メテリアは自分のコーヒーを注いだカップを持って台所の棚の陰に隠れた。食卓と台所は一繋がりになっていて部屋で仕切られているわけではないので、隠れきれるものではないが、簡単に身を潜めるぐらいならできる。
神父はメテリアが隠れるのを待ってから、席を立ってドアを開けた。
「どうなさいました？　ロッテンリッヒさん」
メテリアに絡んでくる少女達の一人の名だ。だが彼女にいつもの甲高い声を上機嫌に出す覇気がない。
「た、助けて下さい！　ジュリエッタが…ジュリエッタが……」
「落ち着きなさい。何があったのですか？」
少女達の仲間のもう一人の名を呼んで錯乱している彼女を落ち着かせるように、神父は至極落ち着いた声だ。優しいが、凛とした声で少女を宥める。
「ゆっくり話してください。ジュリエッタさんがどうなさったのですか？」
嗚咽混じりになった少女はその息を小さく弾ませて息を呑む。
「ジュリエッタが、吸血鬼に襲われたんです」
メテリアは思わず声を上げそうになった。それを辛うじて呑み込んだ。
「ジュリエッタのお母さんが、朝、ジュリエッタを起こしに行ったら、もう冷たくなってて……ベッドのシーツは血まみれで、ジュリエッタの首に牙で血を抜かれた痕があって……」
とうとう少女は泣き出した。
「ロッテンリッヒさん。礼拝堂で少し待っていて下さい。私と一緒にここを出ましょう」
そう宥めて神父は泣きじゃくる少女をドアの外へと追い出す。
「ミス・メテリア。俺が出て行ったらすぐに家へ帰れ。玄関は閂をかけて、家中の窓やドアを閉め切って一番外から遠い部屋に居るんだ。いいね？」

小声で一方的に告げると、神父はすぐに礼拝堂へと向かう。
彼に忠告されるまでもなく、メテリアは家へ帰るつもりだった。
恐れていたことがとうとう起こってしまったのだ。

抱擁

じっと椅子に座り、自分の手を見つめていた。
家の中は隅々まで見てまわった。鍵を三回も四回も確かめ、全ての窓が閉まっているか何度も点検してまわった。夜になっても明かりをつけず、中庭に面したこの部屋の隅でじっと椅子に座っている。
人の声が家中に響いている。
だが、火の消えた家には誰もいない。
聞こえてくる人の声は、この家からではない。
外からだ。
それも外で祭りでもしているような歓声ではなく、明らかにこの家に向けられた罵声である。
「吸血鬼！　早く姿を現せ！」
「神々の力で滅ぼしてやる！」
「吸血鬼は滅べ！」
耳を塞いでも入り込んでくる声は防ぎようがなかった。
何処かでガラスの割れる音が響く。
石でも投げられているのだろうか。
こうして椅子に座って耳を塞いでいても、何もできない。
時間が経てば、暴力に訴えてでも人々が入り込んできて、メテリアは捕まる。
捕まれば結末は見えていた。
吸血鬼として、殺されるのだ。
未練のある人生はない。むしろ早く終わってしまってくれることを誰よりも望んでいた。このまま一生、この屋敷に閉じこめられて飼い殺されるより、早々に死んでしまった方が自分にとっても他人にとっても良かったのだろう。
それができなかったのは、わずかな希望がメテリアの後ろ髪を掴んでいたのだ。明日になれば、平凡であっても怯えない日々がくる

のではないかと、望んでいたのだ。
吸血鬼の祖父と人間の祖母の間に生まれたのがメテリアの母で、その母を愛したのがメテリアの父だった。父は正真正銘の人間で、しかもその時すでに他に子供が居た。先妻を病で亡くした父は、素性を隠して屋敷で努めていた母を見初めた。だが、メテリアを生んだ母はすぐに死に、父は正式な後妻を娶った。
そうして、メテリアは吸血鬼の血が混じる混血児として、領地の辺境へ追いやられたのだ。
領地の端の屋敷に暮らすようになったのは、まだ物心もつかない頃。
ようやく一人で台所に立てるようになったばかりだった。小さな手には料理器具は全て大きく、冬には擦り傷が酷くて包丁を握れず、保存用の肉だけで過ごしたこともある。死に物狂いで家事を覚えた。ただ生きることに必死だった。
気づけば、メテリアは孤独を共としていた。一人でいる時間が何よりも心地よく感じていた。
そのはずだった。
今は、一人でいることが不安でたまらない。孤独でいることが恐ろしくてたまらないのだ。
メテリアは膝を抱えてそれに顔を埋める。
静かになっていた。
鼓動の音だけが大きくうねって体全てを包んでいる。
吸血鬼を憎めばよかったのだろうか。
村人達や親戚達のように、盲目的にただ吸血鬼を憎んでいればこんなことにはならなかったのだろうか。
だが、吸血鬼を憎む気になれないのは、わずかに生活を共にした父が母の祖父について話していたからだろうか。
彼等は遠い隣人なのだと教えてくれた父は、今、この場にいない。
「こんなところにいた」
溜息が聞こえた。

永遠に感じられなければいいと思っているのに、今この場にやってきた人の気配はメテリアに安らぎを与えた。
この人が自分を殺しにきたのだとしても、メテリアは笑顔で迎えてしまったのかもしれない。
だが、部屋のドア先に立っていたのは、人ではなかった。
「ミス・メテリア」
ほっと一息ついたのは、人の形をしていて人ではないモノ。
「大丈夫？」
吸血鬼だ。
気がつけば、メテリアは差し出された手を振り払っていた。
乾いた音と共に何かが壊れていくのを感じて、メテリアは恐怖にたえられなくなって叫ぶ。
「放っておいて！　アンタのせいよ！」
彼が珍しく息を呑むのを感じた。
「アンタのせいで、私は殺されなくちゃならないのよ！」
メテリアは部屋に並べてあった写真立てを手に取っては投げた。
「吸血鬼のせいで、私は…！　私は…！」
自分の荒い息が遠くなる。
視界がぼやけて、次に暗闇の中が明確な像を結ぶ。
花瓶が割れていた。
大切にしていた写真立ても割れていた。
その上に、何かが飛び散っている。
眼前では、普段は見えないはずのプラチナブロンドの頭頂が揺れていた。
後退るとそれを拒むように壁が背中を阻んだ。
現実を直視しなければならなかった。
僧衣を着た人ならざるモノが、額を押さえて床にうずくまっている。
その長い指の間からは止めどなく何かが滴っている。
彼は顔を上げた。

「気は済んだか？」
怒るでもなく、軽蔑するでもない声は、張りつめた空気に羽根のように跳ねた。
彼は額を押さえたまま、真っ直ぐメテリアを見据えた。
闇よりも暗い漆黒の瞳が何よりも明るく見えた。
彼が立ち上がる。
メテリアは床を凝視していた。色こそ見えないが、暗闇であるはずの部屋の中が鮮明に見えている。
普通の人間にはできないことだ。
「ミス・メテリア」
呼びかけられても応えられなかった。
だが、頭の上から生暖かい液体が滴ってきて咄嗟に顔を上げる。
彼の白い額から止めどなく流れている。痛いはずだ。額が裂けている。
それにも関わらず、彼はメテリアを見つめて離れない。
手を伸ばす。
しかし、それが届くはずもない。
メテリアは駆けだした。彼の目の前まで駆け寄ると、彼が額を押さえている腕を無理矢理剥ぎ取って、睨む。
「痛いなら痛いって言いなさいよ！　見てるこっちが痛くなるわ！」
メテリアに怒鳴られて、彼は呆れたように口を開けた。
「……いや、それほど痛くないから…」
「つべこべ言わないでよ！　ほら、そこに座って！」
先程までメテリアが座っていた椅子に彼を座らせて、彼女は棚から救急箱を取り出す。
倒れたテーブルを起こし、その上に救急箱を乗せると中から包帯と消毒液を取り出してピンセットに綿を挟んで綿を消毒液で湿らせる。
彼に額から手をどけさせると、小さな傷の割に出血量が多いだけだとわかった。綿で流れた血を拭き取り、再びピンセットに綿を取

る。
「……どうして避けないのよ。アンタの反射神経なら避けられるんでしょう」
「アンタじゃなくて、リューク。二人で居るときぐらい名前で呼んで欲しいなぁ」
「その軽口に綿を詰め込んであげるわ。神父様」
メテリアは溜息混じりに傷に消毒液をつけた。
「酷いな。辛い時はちゃんと呼んでくれないと。慰めることができないじゃないか」
「辛い？　バカなこと言わないでよ」
救急箱からガーゼを取り出し、メテリアは神父の額に貼り付ける。プラチナブロンドが血で汚れていたが、それはどうしようもなかった。
「アンタに慰めてもらうようなことなんかないわ」
包帯を手に取る。広げたメテリアの目頭を、ふいに眼前の神父が触れてきた。
「何を…」
「じゃぁ、何で泣いてるのかな」
告げられて初めて、メテリアは自分の頬が濡れているのに気がついた。
流れているのは血では無く、涙だ。
包帯を取り落とした。
メテリアの手を、神父は緩やかに引き寄せた。そのまま、包み込むように彼女の体を抱き込んで頭を撫でる。
小さな子供をあやすように背中をさすられ、メテリアは顔をしかめる。
「放して。子供じゃないのよ」
その声がまだ鼻声になっているのを感じて、メテリアは更に気分が悪くなった。
「子供だよ。まだ生まれたばかりの」

神父はメテリアを抱き込んだまま、彼女の耳元で囁く。
「十七の私が子供だったら、アンタは幾つなのよ」
「九十七歳」
「……」
「失礼だな。俺はまだ若いんだよ」
冷たい指がメテリアの首筋に触れる。
「まだ伴侶も持てない若造だ」
「……アンタね。調子に乗らないでよ」
「まぁ伴侶が一人だけと決まっているわけじゃないからね。ミス・メテリアもいつか迎えにくるから待っててよ」
「最低！」
今度こそメテリアは腕に力を入れて、神父から離れた。
「じゃぁ一番に迎えにこようか？」
「迎えに来なくていいって意味よ」
メテリアは床に落ちた包帯を拾い上げて、即答する。
「わざわざ探してきてもらえるんだ」
「どういう理屈よ、それ！」
悪徳詐欺師の理屈だ。
「でも、来てもらわなくても、ちゃんと迎えに行くから」
「腐っても神職のくせに」
「教会で妻帯は認められてますよ」
包帯を神父の首に縛り付けたくなる衝動に駆られながら、メテリアは彼の額に包帯を巻き付ける。
「それに、吸血鬼のくせにどうして神職なんてついてるのよ」
「仕事ですから」
立て板に水を流すように神父は答えるが、違和感を感じてメテリアは眉根をよせた。
「仕事？」
「そう。家を追い出されていますので、手っ取り早く生活力が欲しくて」

確かに、神職であれば生活に困ることはない。最低限の衣食住は修行中から保証されている。だが、
「アンタ、いったい何十年その顔なの？　いい加減怪しまれるわよ」
吸血鬼の寿命と人の寿命は違う。
「心配してくれるんだね」
およそ神職についているとは思えないような手つきで神父は包帯を巻き終わったメテリアの手を絡め取った。
「ええ、心配よ。教会の神父様方が卒倒なさらないかね」
神父の手を払いのけて、メテリアは余った包帯をハサミで切り取る。
「こちらにも事情があってね。かれこれ五十年ほど神にお仕えしてますよ」
にっこりと神父は微笑む。聞きたいことがあるなら言ってみろ、というようだ。好奇心はあるが、メテリアはそれ以上尋ねないことにした。
「それで、ここへは何をしにきたの？　まさか私に殴られるためじゃないでしょう」
自分でも不思議なほど落ち着いた声だった。神父に向かって暴れたお陰か、思考は冷静に保たれている。
「もちろん。君を助けるためだよ」
そんな理由で神父が動くとは思えない。彼はもっと打算的だ。
「嘘はやめなさいよ。馬鹿馬鹿しいから」
メテリアはさっさと包帯や消毒液を救急箱にしまい込むと、棚に戻すべくその場を離れる。
後ろから溜息が聞こえてきた。
「本当だよ。村の人は説得したから」
「説得？　そんなことができる状態じゃなかったでしょう。ジュリエッタは吸血鬼に殺されたんじゃないの？」
「ジュリエッタはまだ死んでなかったよ。血を抜かれて危ない状態ではあったけど。今頃、街の病院で輸血されている頃だね」

咄嗟に振り返って、メテリアは顔をしかめる。
「まさか、アンタが……」
「違うよ。言っただろう？　俺は君が食事の世話をしてくれている間は人間を食べることはないって」
神父は白い指は滑らかな顎にあてる。
「かといって、俺はこの村に新しいお客が入ったとは聞いていない」
「このままだと、アンタが血祭りになるわよ」
「その前に君が危ないと思うけどね」
その通りだった。ジュリエッタが死んでない状態でこの騒動だ。もし死者が出ることになれば、確実にメテリアが首を切り落とされる。
「でも未来の妻の身が危ないのはいただけないからねぇ」
メテリアは不穏当な言葉を聞き逃さなかった。
「アンタの任期が終わるまでの付き合いよ。さっさと故郷でも何処へでも帰ってちょうだい」
「そうはいかないよ。さぁ、メテリア。荷物をまとめて…」
「出て行くのはアンタよ。ひとまず教会に帰りなさい」
是非もなくメテリアが言い放つと、神父は肩を大仰に竦める。
「駄目だよ、メテリア。君も一緒に来るんだ」
急に親しげに名を呼ばれて、メテリアは不機嫌に神父を睨む。
「どうして…」
「村の人たちと約束したんだよ。俺と君が一週間、教会で暮らしてみるから、ここは引いてくれって」
メテリアは未だかつてないほど、自分の出生を呪った。

困惑

朝日が睫毛を縫って眠気を覚ましに入り込んできていた。だが、メテリアはそれに抵抗するように目を閉じる。

「メテリア」

普段、こうして人に起こされることはない。

家には一人なのだ。

小さい頃、母に額を撫でられ、優しくその額に口づけられ目覚めた記憶が微かにあるぐらいだ。

ぼんやりとしていた感覚が急に覚醒する。

誰かが、メテリアの額に唇をあてているのだ。それは鼻先を掠めて、甘い香りとともに彼女の唇へと触れる。

寸前でメテリアは頭を引っ込めた。そして力任せに頭を突き出す。

軽いうめき声と共にメテリアの額がじんじんと痛んだ。

「……痛い…」

メテリアは赤く腫れただろう額をさする。

「……痛いのは、こちらなんだけど……」

声がくぐもっているのは口元を手で覆っているからだろう。狙い通りに彼の口元を額は捉えたようだ。

「おはようございます。神父様」

若干の優越感を感じながら、メテリアはくるまっていた毛布から抜け出る。

この狭い部屋はメテリアの家ではない。教会だ。

昨日、神父に連れられて教会へやってきたのだ。目深に帽子を被って外に出たので村人達の顔は見えなかったが、メテリアを見送った彼等の複雑な憎悪は感じられた。

しばらく外に出ることはできない。

これは自宅だろうと同じことなのだが、教会は少し勝手が違う。

神父がいるのだ。

「朝食を作りますから、礼拝堂の掃除でもしていて下さい」
油断のならない彼にベッドを勧められたが、断固拒否して食卓の隅に陣取り徹夜するつもりだったのだが、すっかり寝てしまっていたようだった。それに、寝た時間が遅かったらしく、先程のような洗礼を受けてしまったのだ。
自分のふがいなさを噛み締めて、メテリアは台所へ向かいながらエプロンをつける。
「こういう生活も悪くないねぇ」
礼拝堂へ続くドアの脇に立てかけられているホウキを手にして、神父は悪意のなさそうな冷笑を浮かべる。
「新婚みたいで」
「じゃぁ神父様はそこらへんの草でも食べてて下さい」
「一度で良いからリュークって呼んでくれないかな」
「……豚の解体用の包丁ってここにありましたっけ？」
メテリアは真剣に台所の棚を探し始めると、神父は礼拝堂へそそくさと去っていった。
「……こんな生活が続くなんて……」
うんざりとして、メテリアは野菜を出刃包丁で叩ききった。

朝食を終えてから、教会に来客があった。
「メテリア様。これはどういうことでしょうか」
口数の少ない彼が自分から質問してきたのは、これが初めてだった。
メテリアは苦笑いを浮かべる。それは、この状況があまりにも異常だからだろう。
「ええと……だから、さっき説明した通りなのよ。ヴェティル」
それでも、眼前の若い男は納得がいかないのか頑として表情を変

えなかった。鼻筋の通った端正な容貌の男である。一見痩身に見えるが、肢体は引き締まり、表情もそれと相まって凛々しい。一筋の乱れもなく焦げ茶の長めの髪を首の後ろでまとめ、清潔感のある詰め襟の良い仕立ての服をまとった姿は誰が見ても惚れ惚れするものだ。だが、表情のほとんど変わらない蒼の瞳は抜き身の剣に似ていた。

「私がお尋ねしているのは、この教会でお過ごしになることとなった経緯ではありません」

通常、主人に仕える者から質問をすることは禁じられている。それを承知で尋ねてくる彼は、普通ではない。

「どうして、この村からお逃げにならなかったのかをお尋ねしているのです。貴女のお父様は、貴女を拒絶されたりなさいません」

彼が、毎週メテリアに物資を届けてくれる父の使いだった。

小さな頃からメテリアを見ている彼だけに、彼女の心をすぐに読んでくる。

メテリアが言い淀むと、食卓に紅茶が差し出された。

「恐ろしい思いをされたようですので、一時的に私がお嬢様の身柄を預からせて頂いたまでですよ。そう彼女をお責めにならないで下さい」

この上もなく嘘くさい笑みを浮かべて神父はヴェティルに紅茶を差し出し、自分は食卓近くの窓脇に立った。

「ヴェティエル卿がメテリア嬢をお父様の庇護下へ置いて下さるなら、村の人たちも落ち着くことでしょう」

ヴェティルはしばらく神父を見据え、目を細めた。

「吸血鬼が現れた、というのは本当なのですか？」

「ええ。残念なことに。何とか早く見つけてしまいたいのですが……」

憂いを帯びた瞳を伏せる神父をヴェティルは確かめるように見遣る。

「ではまだ見つかっていないのですね」

「はい。申し訳ありません。私の力不足です」
ヴェティルは少し息をついた。
「メテリア様がクオーターだと、何処でお知りになったのですか？」
「派遣先の住居者名簿は必ず目を通しておりますので」
初めて会ったとき、神父がメテリアの名をすらすらと挙げたわけである。だが、小さな村とはいえ数百人分の顔や名前や履歴を覚えるなど並大抵のことではない。
「そうですか」
神父の応えに、ヴェティルはあっさりと頷き、今度はメテリアをその蒼の双眸に捉えた。
「ではメテリア様、私は貴女の家にしばらく滞在いたします」
メテリアは目を剥いた。こんなことは今までにないことだ。
「で、でも、お父様のお仕事が……」
「お父様には貴女様の様子を見てから行動するように仰せつかっております」
それほどメテリアは心細そうに見えるのだろうか。思わず自分の頬をつねってみたくなる。
「……そんなに私、頼りない顔してるの？」
今度はヴェティルが少し目を見開いた。少し口を開いてから、改めてよく透る声を出す。
「いいえ、メテリア様は普段通りです。しかし、吸血鬼が未だ発見されていない事態で私が帰ってしまっては、何か起こった際に対処できません」
メテリアは肩を竦める。生真面目なヴェティルの顔を覗き込んで目を細めた。
「心配？」
「はい」
鉄面皮はぴくりとも動かない。メテリアは眺めるのに飽きて体を起こした。
「私も家に帰りたいんだけど」

「それはなさらない方がよろしいでしょう」
お節介な口を挟んできたのは神父だ。彼はにこやかにメテリアを脅す。
「村の方々と約束しましたから」
違えれば村には居られなくなるぞ、というのだ。
「それでは、私は貴女様の家に待機しておりますので」
話はまとまったとでも言うように、ヴェティルは席を立つ。
「あ、ヴェティル」
メテリアはその後を追って声をかけた。
ゆっくりと振り返るヴェティルに、メテリアは笑いかける。
「あとで食べるもの、作りに行ってあげるわ」
ヴェティルは生真面目に頭を下げた。
「ありがとうございます」
静かに彼がドアの先へと消えると、隣りで神父が大きく背伸びをした。
「なんか、堅物だなぁ」
「ヴェティルはあんな感じよ。ずっと」
メテリアは紅茶をすする。今朝メテリアが煎れて作り置いておいたものだ。神父は自分から進んで台所に立つことなどない。
「でも、ずっと動揺してたよ。憐れな子だね」
見た目は神父よりも若干年上に見えるヴェティルを子供扱いして、彼は肩を竦める。
「ヴェティルが慌てる姿なんて今まで見たことないわよ」
「わかってないな。昨日、吸血鬼が居るってわかって今日や来たんだろ？　相当、急いで来たに決まってるじゃないか。それに俺みたいな神父が側にいるもんだから、慌てる慌てる」
「アンタとヴェティルを一緒にしないでよ」
神父は苦笑する。
「最後の顔なんか傑作だったけど？」
「そろそろ孤児院に行く時間だわ」

メテリアが飲み終えたカップを取ると、神父も窓際から離れた。
「昼か。じゃぁ俺も行くかな」
今日も夏の日差しが燦々と降り注ぐ快晴だ。
「日傘とか、さすの？」
「さしません」
妙なほど自信満々に応えられて、メテリアは神父の生白い顔を見遣って顔をしかめる。日傘もささずにあれだけ白い肌を保てるというのは、吸血鬼以前の問題として腹が立つのだ。
睨むメテリアを尻目に、神父は笑う。
「俺は特別だから」

問題

宵闇に迫られて、夕食を作り終えたメテリアは、台所を出たところで小さな手に引き留められた。
エプロンの端を掴んでいるのは、まだ外で遊んでいたはずの少女だった。
「どうしたの？　エレナ」
メテリアは驚いていた。少女も昨日の騒ぎを知らないわけではないだろう。
昼間、神父と教会を出た時に初めて大通りを通った時には幾人もの村人に睨みつけられたものだ。彼等がメテリアに襲いかかってこなかったのは、まだ昼間だということと、神父が側に居たからだ。日光の下を吸血鬼が歩けないなどということを、ヒステリー状態の人々に通用する理屈ではないが、神父が側に居たことが功を奏した。
その神父も今は側にいない。
この少女はメテリアを怖がりながらも、頼ってきているのだ。
メテリアは少女と視線を合わせるためにしゃがみ込んだ。
「お話してみて」
少女は頷く。小さく深呼吸してから、メテリアの目を見つめてくる。
「あのね、ダイがおかしいの」
「ダイが……？」
メテリアは今日の昼食時間を思い出す。皆が全て平らげる中で、ただ一人今日に限って何も食べなかった少年だ。
「うん。今日のお昼ご飯も食べなかったし、おやつも食べなかったの。それに、雨の日じゃないのにお部屋に入ったまま出てこないんだよ」
外で遊ばないような少年ではなかった。
メテリアの中で何かが符合していく。だが明確な像を結ばず、あ

やふやな形で残った。
「じゃぁ、エレナ。私と一緒に…」
「大丈夫ですよ、エレナ。ダイは少し疲れているだけですから、そっとしておいてあげましょうね」
少女と一緒にメテリアが見上げると、神父が微笑んでいた。周りには子供を大勢連れているが、彼等はメテリアには近づこうとしない。
「さ、夕食の時間です。皆さん、神様に感謝していただきましょう」
神父は視線だけでメテリアに語りかけてくる。
もう帰れ、というように扉に視線を遣るのだ。
子供達を引き連れて食堂へ向かう神父を見届けてから、メテリアは一人孤児院を後にした。
夕焼けは既に後退していた。
墓地丘陵の向こうから濃密な闇が辺りを浸食し始めており、村を包み込んでいくようだった。
メテリアはこれから通りを一人で歩いて帰る気になれず、墓地の中を歩き出した。
墓石の古さも解らないほどの暗闇となりつつあるのに、メテリアの目は碑文をしっかりと捉えている。
今までにも、感じたことだった。
普通の人であれば、明かり無しでは歩けない道もメテリアは歩くことができる。鮮明な色を持って見えるわけではないが、白黒のきちんとした像が見えるのだ。
ぼんやりと碑文を眺めて歩いていたメテリアの目に、見慣れた名前が飛び込んできた。
それは、まだ真新しい墓石だった。
碑文には、前任の神父の名が刻んである。
メテリアは未だに供える花の絶えない墓石の前に座り込んだ。
「……来るのが遅くなって、すみません。神父様」
良いのだよ、と何処からか聞こえた気がした。

気のせいだとわかっていても、メテリアは俯いて微笑む。
こうして、幼い時からずっと頭を撫でてもらっていたのだ。懐かしさが頬を撫でて、嗚咽が漏れた。
吸血鬼のクオーターという事実を受け入れて、幼い時から見守ってくれていた人だった。
「……ごめんなさい。神父様……」
命の恩人と呼んでも良い人だった。
近所の子供にいじめられた時も、鳥かごのような生活に耐えられなくなって自殺をしかけた時も、いつも側にいてくれた人だ。
いつも与えられてばかりで、とうとう何も返すことができなかった。
突然、病に倒れた神父を看病することも葬式に参列することも、ただメテリアに勇気が無いばかりに何もできなかったのだ。
後悔ばかりが先走り、とうとう今の今まで墓へ赴くことができずにいたのだ。
ふいに、光が差した。
「メテリア様？」
聞き覚えのある声に顔を上げると、ヴェティルが珍しく目を丸くしてこちらを眺めている。
「どうなさったのですか、こんな夜に……」
彼はランプを地面に置くと、メテリアに手を差し出す。メテリアはその手とヴェティルの顔を見比べて、俯く。
「……ごめんなさい。何か作りに行くって言ってたのにね」
「メテリア様が謝られるようなことをされた覚えはありません」
いつものように生真面目に応えられて、メテリアは苦笑する。そして、差し出されたままだった手にしがみついた。
「神父様はどうなさいました？　ご一緒ではないのですか？」
「先に帰れって」
ヴェティルに支えられて立ち上がると、彼は顔をしかめていた。
「吸血鬼が出て、危険だと言ったのはあの方のですよ」

「それもそうね」
さすがに神父が吸血鬼だとは教えられない。
「メテリア様もお気をつけ下さい」
「私が死んで、困る人間はいないわ」
むしろ遺産の配当が増えることを喜ぶ人間が増えるに違いない。
「いいえ。そんなことはありません」
ヴェティルがメテリア越しに何かを見据えた。メテリアも振り返る。
そこには一人の少年が、俯いたまま立っていた。
「メテリア様は誰にでも慕われておいでです」
少年の様子はおかしい。孤児院の子供であれば、真っ直ぐにメテリアを見つめてくるはずだ。
少年が顔をあげた。青白い顔だった。
「ダイ……？」
孤児院でも活発な少年だ。だが、その短い黒髪は乱れ、生気の感じられない表情だというのに、茶色の瞳だけは爛々と輝いている。
「……どうしたの？」
少年は応えない。代わりに不気味なほど口の端を吊り上げて嗤った。
「！」
メテリアは努めて表情を変えないように、少年との距離を目測する。
ざっと大人が十秒はかかる距離がある。
「メテリア……姉ちゃん……。……もう、大丈夫だから……」
少年が微かな声を上げる。
「姉ちゃんを、いじめる悪い女は……もうすぐ、居なくなるから……」
たどたどしい言葉の端に、メテリアは純粋な悪意を見つけて身を引いた。
「メテリア様」

ヴェティルがメテリアを下がらせる。庇うように立つと、少年はヴェティルを睨みつけた。
「……邪魔をするの……？　お兄ちゃん……」
その瞬間。
少年の脚が地面から浮いた。蹴るというには凄まじい勢いで、一足飛びにこちらへ向かってきたのだ。
「邪魔を、しないでぇぇぇぇっ！」
「ヴェティル！」
逃げろ、という言葉を発する前に、ヴェティルはメテリアを突き飛ばして、少年の腕を掴んだ。
大の男のヴェティルに捕まれば、普通の子供であれば抵抗できるはずもないが、少年は驚きべきことにヴェティルの腕を逆に振り払った。長身のヴェティルがあっさりと弾き飛ばされ、姿勢を崩す。その隙に少年はメテリアの前に立った。
「お姉ちゃぁぁん……」
少年の赤茶色の瞳は暗く淀んで、光はない。
「ダイ……。まさか……」
メテリアは息を呑む。脳裏に浮かんだのは不吉な推測だった。
そのメテリアの目に、ふとヴェティルが入って、思わず叫ぶ。
「やめて、ヴェティル！」
彼は低く姿勢を構える。一瞬後には、いつもの無表情で少年の背中を一閃したように見えた。
だが、少年はメテリアの声にそれより半瞬早く反応し、空中へ飛び上がると、ヴェティルを凄まじい形相で睨みつけて暗闇へと去っていった。
「……申し訳ありません」
ヴェティルは帯剣を鞘に戻すと、メテリアに向かって一分の隙もなく頭を提げた。
「……何を謝っているの？」
メテリアはヴェティルが墓石の近くに置いたランプを手に取る。

「メテリア様のご意向を無視いたしました」
彼の生真面目さには時々頭が下がる。
「いいの。あの場合は、当然だわ」
「ご処分を」
なおも項垂れたままのヴェティルを眺めて、メテリアは肩を竦めた。
「私の手料理を食べてちょうだい。六歳の頃より上達しているかどうか体感して」

消失

久々に我が家の台所に立つと、懐かしくなった。最近では教会の台所に立つことが多かったためだろうか。
メテリアは、取り出したまな板の角が大きく切れているのに苦笑する。
「出刃包丁と間違えて、牛の解体用の包丁で野菜を切ろうとしたのよね」
「そんな恐ろしいことをしていたんだねぇ。ミス・メテリア」
耳元で聞き慣れてしまった声を聞いて、メテリアは思わず包丁を逆手に掴んだ。
「……危ないじゃないですか」
喉元に包丁の刃先を突きつけられて上向いているのは、案の定神父だ。
「……いつのまに入り込んだんですか？」
「ちゃんと呼び鈴を鳴らしたよ？」
ぬけぬけと神父は笑う。
「それより、会ったのかい？　ダイ君に」
「！」
メテリアの手が滑って神父の白い首に包丁の刃先が当たった。
「当たってる、当たってる！」
首の薄皮がうっすらと切れて、神父は慌てた様子でメテリアから放れた。
「ダイのこと……！」
「彼はダンピールだから。分化が起こったんだろう」
神父は首をさすりながら、メテリアを見遣る。
「ダンピール？　あの子が？」
「言ってなかったかなぁ。君の住所録には混血児の記載はなかったって」

「それはつまり……」
「あの子は母親が人間らしいね。でも彼の家族は母親にダイを捨てさせたらしいよ」
よくあることだ、と言わんばかりに神父は肩を竦める。
「とりあえず、きちんと戸締まりしておけば大丈夫だよ」
「ちょっと待って。先天性の吸血鬼があんなに錯乱するなんて聞いたことないわよ！」
「ああ、あれはねぇ……」
のんびりと神父が話し始めた矢先、大きな破裂音が台所中に響いた。
「あ、来たかな……」
「何が！」
掴みかからんばかりに神父を睨むと、彼は明後日の方向を見遣った。
「ダイ君が、君を探しに」
「それを早く言いなさいよ！」
メテリアは包丁を置いて、台所を飛び出した。
屋敷というには小さいとはいえ、中央ホールに全ての部屋がつながっている。二階へ上がる階段の正面は正面出口で、今はその観音開きの戸が無惨にも壊されている。
「こんな……！」
息を呑んだメテリアの耳に、二階から爆音が聞こえてきた。
「ヴェティルが……」
二階の居間にはヴェティルが居るはずだ。メテリアは二階へと駆けだした。
一カ所だけドアが壊されている。
居間だ。
「ヴェティル！」
部屋へ入ると、目も当てられないほどずたずたになっていた。
骨董品のソファは無惨にも引き裂かれて、高級木材のテーブルは

まっぷたつだ。その間を、少年とヴェティルが走り回っている。
少年の腕は既にずたずたで、血がしたたり落ちている。それにも関わらず、彼はヴェティル目掛けて、狩りをする獣のような形相で血塗れの腕を振り下ろす。それをヴェティルが剣閃で弾きかえしている。
メテリアが部屋へ入ろうと駆け出すと、ふいに肩を掴まれた。
「危ないよ。お姫様」
神父が例のごとく飄々とした口調で部屋の中の二人を見遣る。
「どういうことなの？　ダイはどうしたの！」
「笑い上戸とか、泣き上戸とか聞いたことあるだろ？」
いったい今になって何の話をしようというのだ。訝るメテリアに神父は根気よく続けた。
「人の血は俺たちにとって酒と同じなんだ。飲み過ぎれば酔っぱらった状態になる」
「……だから、百歳以下は駄目？」
「そう。今の彼は、アルコール中毒を起こしたようなものさ」
神父はあっさりと応えて、
「だから近づくと危ないよ」
「だからって、ヴェティルを見捨てろっていうの？」
相手は子供であっても疲労感覚のない中毒者だ。ヴェティルが先に力尽きるのは目に見えている。
メテリアは神父の手を振り払う。
「そこでアンタだけ見てなさいよ！」
踵を返すと、部屋へ飛びこむ。
「メテリア様！　お下がり下さい！」
メテリアに気を一瞬取られたヴェティルが少年の豪腕に弾かれた。彼はその力に押されて、床に倒れ込む。
「そんな状態で人を気遣うのはやめなさい！」
ヴェティルに駆け寄ると、メテリアは彼から剣を奪い取る。
「こんな剣、扱えないくせに持ち歩かないの！」

メテリアは剣を構える。
少年はメテリアをみとめて少し怯むが、すぐに狂気の激情の押し流されて、標的をメテリアに変えた。
少年の動きは速い。
その俊足に任せて、少年は両腕を振り上げる。メテリアはその瞬間を狙った。
「……ごめんね！」
胴に剣の柄をたたき込んだ。少年はふいをつかれて動きを止め、そのまま床に倒れ込んだ。
倒れてしまえば、少年はごく普通の子供に見える。
メテリアは剣を握りなおした。
今、ここで彼の首をはなてしまわなければ、少年は吸血鬼になる。
剣を持つ手が震えた。
暑くもないのに、頬を汗がつたう。
「お見事お見事」
神父だ。
彼はいつのまにか部屋に入ってきたかと思うと、少年を担ぎ上げた。
「この子は貰っていくよ」
「どうして……！」
「まだ小さいから、更生の道があるんだよ。知り合いに預けてくる」
「そんな、その子は……」
神父は目を細めてメテリアを見遣る。
「一つ、教えておいてあげるよ。俺たちは吸血鬼なんかじゃない。君たちの遠い隣人だ」
「……それ……」
メテリアの父が彼女に言い聞かせたことだ。
彼等は、遠い隣人だ、と。

それきり、神父は姿を消した。

再会

緑の葉が光彩を反射して、日だまりを造っていた。日だまりに踏み出すと、その場は暗く陰って煌めきがメテリアに移る。

彼女はふと瞳を細め、日だまりから抜け出た。

眼前に広がる林の向こうには、翳りを帯びた教会が見えた。彼女は教会へ続く小道を再び歩き出す。

普段は子供が遊んでいる林は死んだように静まりかえっている。夏の陽光も冴え冴えと差し込んでいるようだった。人が歩くことによって自然とできた小道は乾いた埃を巻き上げた。

耳が痛い。

彼女は歩きながら目を伏せた。静寂は音という音を吸収し、頑強な壁で聴覚を遮っていた。自分の足音すら、聞こえない。

この辺境の村では、季節は夏と冬しかない。大半は冬で、夏はほんの数ヶ月に過ぎないが、この林は音に溢れているはずだった。夏は小鳥のさえずりや木々の葉音が、冬には積もった雪が小枝を軋ませる音が常に優しくあった。

靴が埃を舞い上げる。

いつも以上の人通りがあったのだ。

でこぼこにへこんだ道には深い轍が残っている。それは真っ直ぐ林と教会を繋ぐ。

昨日、教会の神父が死んだのだ。

各地に点在する教会には、最低一人の神父が常駐する。無論、寒村にも教会はあるので、中央部の教会から実習期間を終えた神父が派遣されてくるのだが、辺境に行きたがる神父は少ない。一度、寒村に派遣されると交替などはほとんど無く、出世の妨げになるのだ。必然的に、辺境へやって来るのは定年も間近の年老いた神父だった。

亡くなった神父も例外に漏れることなく、高齢だった。

メテリアは、本来なら昨日、彼に墓前に捧げるはずだった花束を

抱えて教会に向かっている。昨日は村人が多く、葬式に参列していたために行けなかったのだ。
今日も墓へ向かう人々が朝から出かけていくのを窓越しに見つけた。　結局、メテリアは墓前へ行くことを諦めて誰も居なくなった教会へと向かっている。
教会はどんよりと淀んで見えた。
神父が健在だった頃は、暗い林すらも光が差していたはずだが、居なくなった途端にその加護が消えてしまったようだった。
メテリアは教会の石段を登り、色褪せた扉の前で足を止めた。手に持った花束を見つめて、わずかに溜息をつく。
庭で咲いていたわずかな花をかき集めたが、華やかさとは無縁の花束だった。花屋へ行けば良いのだが、またあらぬ噂を立てられて家から出られなくなるのは苦痛だった。
花束の中にくすんだ赤紫を見つけて、彼女は苦笑する。メテリアの瞳も、紅蓮に近いクリムソンなのだ。髪は目立たないブラウンのくせに、瞳の色だけが突出していて不気味だった。一般に、こんな瞳を持つ者は居ない。
彼女は静かに扉を押した。
少し開いた隙間から、忍び込むように礼拝堂へ入る。礼拝堂には大きな天窓があり、天井から陽光が降り注ぐ。わずかな空気の流れを察して、小さな埃が光の中で舞い散る。
礼拝堂には誰も居なかった。
ふと、メテリアは違和感を覚えて立ち止まる。
ここで、確かに誰かと会ったはずだ。
辺りを見回す。
平凡なほど十字架は天窓の光を浴びてぼんやりと光を反射している。
「……リューク・ゼプツェン神父……」
彼と会ったはずだ。
美しいが、いい加減な神父の吸血鬼に。

「リューク！」
呼びかければ、また後ろから顔を出してくる気がした。
「痛っ！」
突然、空中から無様に人が降ってきた。
腰を床に打ち付けたのか、痛そうにさする姿はよりいっそう不格好だ。
「……格好悪い……」
メテリアに見下ろされて、神父は不機嫌に柳眉を歪める。
「……おかしいなぁ。時間の転移は成功したはずなのに……」
ぶつぶつと呟いて鷹揚に立ち上がる。
彼は神父服ではない。スラックスにラフなワイシャツ姿だ。
プラチナブロンドの髪は一つにまとめて、よりいっそう軽薄に見えた。
「……なんですか、その格好」
「だから、俺はこの場に居なかったことになってたの。なのに、君が俺を呼び出して……」
彼は言いかけて、メテリアをじっと見下ろす。
「な、何……」
「俺の名前を呼んだでしょ」
「そ、それはぁ……」
メテリアが明後日の方向を向くと、彼は面白がるように覗き込んでくる。
「なるほどね。君だけが影響を受けなかったわけか。うん」
一人納得して、頷くと彼はにっこりと笑う。
「いいよ。しばらくここで神父やるよ」
メテリアは口をパクパクさせて、ようやく言葉を絞り出した。
「どうして、そういう結論になるの！」
「ああ、いいね。その罵声が無いと調子が狂うんだよ」
彼は何を思ったのか腕を広げてみせる。
「ミス・メテリア。思い切り抱きついていいよ」

「十字架にでも抱きついておいて下さい！　神父様！」

天窓から覗いていた小鳥たちは一斉に飛び立ち、晴れた空へと、メテリアの怒号と共に舞い上がっていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8266k/

スケープゴートの子守歌

2010年10月8日13時40分発行